

萬葉集のラシ：ベシとの関係をふまえて

古川，大悟
日本学術振興会：特別研究員

<https://hdl.handle.net/2324/7331654>

出版情報：國語・國文. 92 (10), pp.1-21, 2023-10. 京都大学文学部国語学国文学研究室
バージョン：
権利関係：



萬葉集のラシ

——ベシとの関係をふまえて——

古川 大悟

はじめに

本稿は、萬葉集における助動詞ラシの意味について、助動詞ベシとの対照的な関係という観点をふまえて、統一的な説明を提示しようとするものである。

以下ではアラシ、ナラシ、ケラシなどの、ときに複合形とみなされることがある形式も、一括してラシに含めて考える。かりにそれらを除外した場合にも、本稿で示す用例分類の数量的傾向や推量（推論）の質に関して、とくに影響は見られない。

第一節 ベシとラシの対照的なあり方

ラシは従来、主にラムとの交渉をめぐって研究が進められており⁽¹⁾、ベシとの関係はいまだ明確にされていないように見受けられる。稿者はラシを問題とするにあたって、次に述べる二つの理由から、ラムとの関係と同程度に、あるいはそれ以上に、ベシとの意味の分担を考慮に入れる必要があると考えている。

第一点は、消極的な理由である。仁科明「2016」によれば、次のような場合にはラム・ラシどちらも用いられうる。第一例はラ

ム、第二例はラシである⁽²⁾。

桜花 時は過ぎねど 見る人の 恋の盛りと 今し散るらむ

〔今之将落〕

(10・一八五五)

玉に貫く 花橘を ともしみし この我が里に 来鳴かずあ
るらし〔伎奈可受安流良之〕 (17・三九八四 大伴家持)

このような例を仁科氏は「因果関係推量」と呼び、「話し手の手持ちの知識・経験と、その原因・背景との関係（因果関係全体）が未確認だとして想像がなされる」ものと位置づけている。稿者なりに言いかえれば、「破線部」という理由で波線部である」という理由・帰結の関係そのものが確証を欠くものであって、あくまで想像によって述べられているということであろう。仁科氏はラムとラシのこうした重なりが生じる理由を、ラムは「現在推量」、ラシは「原因事態の推量」を起点としつつも、それぞれが意味を拡張させたことで意味領域が近接してきたものと説明する。すなわち、元来異なる意味を担っていたものが、意味拡張によって結果的に重なりをもったと見るのである。両者の元来の異なりは、ラムとラシという形態の相違にも表れているように見受けられ、ラムとラシは関連の深い語として扱われることが多いものの、叙法的なありかたには質的な相違があった可能性がある。ラシと同様に、形容詞的な形態でいわゆる推量や推定に関わる助動詞はベシ

であり、むしろラシとベシに何らかの共通基盤があるとも想定される。この二語の関係を一度考えてみる必要がある。

第二点は、より積極的な理由である。拙稿「2023」でベシについて、三段論法による演繹的な推論を起点とすることで、萬葉集のベシの多義的な振る舞いを整合的に説明できることを示した。本稿の論旨に必要な範囲で再説すれば、演繹的な推論とは次のようなことである。

三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらなも 隠さふべし
「倍思」や (1・一八 額田王)

「隠さふべしや」は反語である。心あるものは三輪山を隠さなという前提に基づき(大前提)、雲に心があると仮定すれば(小前提)、雲は三輪山を隠すはずがないという内容が必然的に導かれる(結論)。前提が真であれば必ず結論も真となるが、この例のように大前提や小前提が真でない場合がしばしばあるので、常に確度一〇〇パーセントの内容が導出されるというわけではない。右の例では現に雲が三輪山を隠してしまっており、現実が推論を裏切ったことに対する不本意さの表現となっている。

朝霧の おほに相見し 人故に 命死ぬべく「可」 恋ひ渡
るかも (4・五九九 笠女郎)

強く恋い焦がれ続けたら死に至るという前提のもと(大前提)、

現状は強く恋い焦がれ続ける日々であり(小前提)、ゆえに今にも死に至るはずであるという内容が導かれている(結論)。大前提に相当する内容が明示的に言語化されることはほとんどないが、恋い死ぬという内容が萬葉集の類型表現としてきわめて多く見出されることから、恋い焦がれることで死に至るという共通理解が、少なくとも和歌の世界で成立していたのだと推定することができ。このように、ベシは演繹的な推論に関わる助動詞であり、適当・当為の類もそこからの展開として説明可能であることを拙稿「2023」で述べた。

議論の中心をラシに移すにあたって参考になるのは、米国の論理学者・科学哲学者であるパース(Charles S. Peirce, 一八三九―一九一四)が示した推論の三形式である。パースによる具体例に即して整理しておく⁽³⁾。

- 1 この袋の豆はすべて白い(大前提)
- 2 これらの豆はこの袋の豆である(小前提)
- ←

3 これらの豆は白い(結論)

1と2から3を導くのが一般的な三段論法に基づく演繹であり、ベシによって表されたと考えられる。これとは別に、1と3から2を導くアブダクション(abduction)という推論形式がある。

- 1 この袋の豆はすべて白い
- 3 これらの豆は白い

←

- 2 これらの豆はこの袋の豆である

床に白い豆が幾らかこぼれているところ、近くに白い豆が入った袋が見つかり、恐らくこの袋からこぼれたのであろうと考える場合を想像すればよい。右の推論は演繹とは異なり、論理的に妥当性・必然性が保証された推論ではないため、導かれる結論は蓋然的なものにとどまる。萬葉集のラシの用例の多くが、実はこのアブダクションに相当するものである。

うちなびく 春来るらし「良之」 山のまの 遠き木末の
咲き行く見れば (8・一四二二 尾張連)

まず、一般的な三段論法による演繹であれば、次のように示すことができる。

- 1 春が来たら梢に花が咲いてゆく (大前提)
 - 2 春が来た (小前提)
- ←

- 3 梢に花が咲いてゆく (結論)

これを次のように入れ替えたものがアブダクションであり、ラシの担う推論形式である。

- 1 春が来たら梢に花が咲いてゆく
- 3 梢に花が咲いてゆく

←

- 2 春が来た

アブダクションは、事実の観察に立脚して、それがなぜ起こっているのかという問いに答えを与える説明仮説 (explanatory hypothesis) を形成する推論である。「ある事実が観察される。もし仮説Hが真だと仮定すればその事実は当然といえる。ゆえに仮説Hが真であると考えるべき理由がある」という機序で、仮説Hが真であることが推論される。梢に花が咲いてゆくのを見て、春が来たのだと考えれば理に適うことから、春が来たことが導かれるのである。説明を要する事実に対して納得を与えるための推論であり、パスによれば、「無数の文書や遺跡がナポレオン・ボナパルトという名の支配者に関連している。私たちはその人を見たことはないが、彼が実在の人物であると考えなければ、それらの文書や遺跡の存在を説明することができない」というように、私たちが納得を得るために「ナポレオンが実在した」という説明仮説が採られていると考えられる。次節以降で詳しく見るように、大部分のラシは、このようなアブダクションの推論形式を担うものと認められる。

演繹とアブダクションに加えてさらにもう一種、2と3から1を導く推論形式が考えられる。個別の事例から一般法則を抽象するものであり、これが帰納である。

- 2 これらの豆はこの袋の豆である
- 3 これらの豆は白い

←

- 1 この袋の豆はすべて白い

観察可能な部分から、その部分が属する全体に関する全称的な言明を導くものである。一部分のみの性質を全体に拡張適用しようとしているのであるから、導出される内容はもちろん必然性を有さず、蓋然的なものである。ラシの用例の中には一部、こうした帰納的推論を担うものがある。

…天の原 振り放け見れば 照る月も 満ち欠けしけり
あしひきの 山の木末も 春されば 花咲きにほひ 秋付け
ば 露霜負ひて 風交じり 黄葉散りけり うつせみも か
くのみならし「奈良之」 紅の 色もうつろひ ぬばたまの
黒髪変はり 朝の笑み 夕変はらひ…

(19・四一六〇 大伴家持)

「悲世間無常歌」の一節である。「うつせみもかくのみ」であるとは、直前までに述べられた自然世界の無常なあり方を受けて、

人の世も同様に無常であるとする表現である。これもまず一般的な三段論法で示すと次のようになる。

- 1 人の世のすべては無常である(大前提)
- 2 紅顔、黒髪、朝の笑みは人の世のものである(小前提)

←

- 3 紅顔、黒髪、朝の笑みは移ろい変わる(結論)

これを次のように入れ替えた推論形式が帰納である。

- 2 紅顔、黒髪、朝の笑みは人の世のものである
- 3 紅顔、黒髪、朝の笑みは移ろい変わる

←

- 1 人の世のすべては無常である

萬葉集の中でラシが確実に帰納に関与すると思われる例は、もっぱら世の無常や人間の定めに言及する八例のみしか確認できない⁽⁴⁾。こうした数量的な少なさは、ラシの性質によるといっても、和歌の中で一般法則を抽象する文脈が限定的にしか現れないことに起因するのであろう。

アブダクションと帰納はともに、一般的な三段論法の結論にあたる内容から、前提にあたる内容を導出する推論である点で共通している。ともにラシが担うのであれば、あえて両者を区別する必要はないのだが、論理上は区別しておいた方が用例解釈に便利

であるので、ここでは分けて示した。これら二種のような推論のありかた(あるいはその一部)は、従来の文法研究で「原因推量」と称されてきた。しかし「原因・結果」とは、生起する事象に対しての名ざしであって、推論判断の機序を問題とする際には「前提・結論」のような語を用いるのが普通である。本稿では判断の構造に焦点を当てて論じたいので、「原因・結果」という言い方は避け、「原因推量」という語も以後用いない。

ここまでの議論を踏まえると、ベシが演繹を担い、ラシがアブダクションと帰納を担うという形で、両者がともに三段論法の構造を基礎としつつ、推論の形式において対照的な意味分担をしていることが想定される。すなわち、ベシが一般的な三段論法に即して前提から結論を導出する推論を、ラシが一般的な三段論法の結論から前提を導出する推論を、それぞれ表していると思われるのである。これこそ、ベシとラシの関係が重要であると考えられる積極的な理由である⁽⁵⁾。次節以降では、萬葉集のラシの悉皆調査を通じて、右のような意味の把握のしかたによってラシを統一的に説明できるかどうかを検証する。

第二節 萬葉集のラシの暫定的な類型

萬葉集のラシは一八〇例ある⁽⁶⁾が、次の二例は未詳の点を含

み、解釈が定まらないため、この後の議論では除いて考える。

妹なるが つかふ川津の ささら萩 あしと人言 語りよら
し「良斯」も (14・三四四六 東歌)

「語りよらし」は「語り寄るらし」の意かと思われるが、第二句の「つかふ「都可布」」が語義未詳であり、一首全体の解釈が判然としないものである。

……隠り恋ひ 息づき渡り 下思に 嘆かふ我が背 古ゆ
言ひ継ぎ来らし「伊比都藝久良之」 世の中は 数なきもの
そ…… (17・三九七三 大伴池主)

古くから言い継いできたのだと述べたうえで、言い継がれてきた内容(ここでは「世の中は数なきものそ」)を直後に示す場合には、「言ひ継ぎけらく」というク語法形がとられるのが一般的である。新大系がこのことを指摘して、傍線部の原文末尾の「之」が「久」の誤写である可能性に言及している。「言ひ継ぎ来らし」という本文を尊重するにしても、文脈に適う解釈を示すことが難しく、ここではやむをえず考察の対象から外す。

右の二例を除いた一七八例は、現時点では、次に示す【図1】のように整理される。大略を理解しやすいように、アブダクションの推論の構造については先に《凡例》を付しておく。

《凡例》

一般的な三段論法による演繹

- 1 大前提
- 2 小前提
- ←
- 3 結論

アブダクション

- 1 一般的な三段論法の大前提
- 3 一般的な三段論法の結論
- ←
- (Ⅱ現に存する事態⁽⁷⁾)

- 2 一般的な三段論法の小前提
- (Ⅱ現に存する事態の理由となる事態)

【図1】

●Ⅰ型 アブダクション……一五九例

- Ⅰ―Ⅰ型 現に存する事態に基づいて、その理由となる事態が成立していることを主張する……一三三例
- ・Ⅰ―Ⅰ―Ⅰ型 現に存する事態(推論の根拠となる事態)

について「見る」「見ゆ」「聞こゆ」「なり」という明確な知覚のマーカ―を有する(例…うちなびく春来るらし山のまの遠き木末の咲き行く見れば)……四四例

・Ⅰ―Ⅰ―Ⅱ型 Ⅰ―Ⅰ―Ⅰ型のような明確な知覚のマーカ―はないが、現に存する事態(推論の根拠となる事態)が言語化され描写されている(例…ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも)……八九例

○Ⅰ―Ⅱ型 現に存する事態について、その理由となる事態が何であるのかを主張する(例…三香原布当の野辺を清みこそ大宮所定めけらしも)……二六例

●Ⅱ型 帰納……八例

●保留 解釈に関する詳細な議論を要する……一一例

次の第三節では、ラシの用例の大部分を占めるⅠ型について、その下位分類のあり方も含めて詳しく説明する。Ⅱ型の帰納は量的にも少なく、その事情は前節で説明済みであるから、第三節ではⅠ型のアブダクションに焦点を絞って論じることにする。

【図1】では、歌の中に明示された表現に即して分類できる例のみをⅠ型・Ⅱ型に振り分けており、文脈や場に依存するなど不確定要素が残るものは一旦すべて保留としている。保留例の中に

は、Ⅰ型・Ⅱ型に類する推論と思しきものも含まれるが、推論の根拠となる事態が明示的に言語化されていない場合があり、歌の解釈を詳しく議論したうえでしか分類ができない。保留としている一例については、後の第四節で稿者による解釈を示したうえで、改めていずれかの類に振り分けるか、新たなカテゴリを立てるかといった検討を行う。したがって、【図1】の保留例まで分類に組み込んだ最終版は、本稿の最後で示すことにする。

第三節 Ⅰ型（アブダクション）のラシ

Ⅰ型のアブダクションは、主張のありかたの違いに即して、Ⅰ—1型とⅠ—2型に分類される。

三・一 Ⅰ—1型

うちなびく 春来るらし「良之」 山のまの 遠き木末の 咲
き行く見れば「見者」 (8・一四二二 尾張連)

第一節で説明したように、現に生じている事態（梢に花が咲きゆく）に基づいて、その理由にあたる事態（春の到来）を導出するという、典型的なアブダクションである。結句で「見れば」と述べられ、花の咲きゆくさまを知覚したということが「見る」という知覚動詞によってマークされている。このように、根拠と

なる事態の把握について明確な知覚のマークをもつものをⅠ—1—1型とし、「見る」以外には次のように「見ゆ」「聞こゆ」「なり」を伴う例がこれに含まれる。

年魚市潟 潮干にけらし「家良思」 知多の浦に 朝漕ぐ舟
も 沖に寄る見ゆ「所見」 (7・一一六三)

宇治川は 淀瀬なからし「無之」 網代人 舟呼ばふ声 を
ちこち聞こゆ「所聞」 (7・一一三五)

……みとらしの 梓の弓の 中弭の 音すなり「奈利」 朝
狩に 今立たすらし「良思」 夕狩に 今立たすらし「良之」

…… (1・三 間人老・中皇命)

いずれも、現に存する事態（舟が沖へと離れてゆく、網代人が舟を呼ぶ声をする、中弭の音がする）に基づいて、その理由となる事態（年魚市潟は潮が引いた、宇治川には穏やかな瀬がない、天皇が今狩りに出発する）が成立していることを推論するアブダクションである。一方で、

ひさかたの 天の香具山 この夕 霞たなびく 春立つら
しも「下」 (10・一八二二 人麻呂歌集)

の場合は、霞たなびくを「見る」、霞たなびく「見ゆ」といった明確な知覚動詞の類はないものの、破線を付した四句全体が、根拠となる眼前の事態の描写となっている。推論の構造自体は、霞が

たなびいていることに基づいて、その理由にあたる春の到来を導出するものであり、これまでの例と同様のアブダクションである。このように、I—1—1型と同じ構造でありながら、明確な知覚のマーカーはなく、根拠となる事態が単に言語化され描写されているものをI—1—2型とする。以下に例を挙げる。

天の川 八十瀬霧らへり 彦星の 時待つ舟は 今し漕ぐら
「良之」 (10・二〇五三)

我妹子し 我を偲ふらし「良志」 草枕 旅の丸寝に 下紐
解けぬ (12・三一四五)

桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市湯 潮干にけらし「家良之」 鶴
鳴き渡る (3・二七一 高市黒人)

以上をあわせたI—1型の中には、次のように「神からならし」という句を持つものが二例あり、ラシの推論の性格を象徴的に示すものとして注意される。

……新た代と 泉の川に 持ち越せる 真木のつまでを 百
足らず 筏に作り のぼすらむ いそはく見れば 神からな
らし「神随尔有之」(8)

(1・五〇 藤原宮役民 I—1—1型)
立山に 降り置ける雪を 常夏に 見れども飽かず 神から
ならし「加武賀良奈良之」

(17・四〇〇一 大伴家持 I—1—2型(9))

第一例は皆が競い合って働く様子を根拠として、第二例は立山の雪を夏じゅう見ても飽きないことを根拠として、その背景に神性があるということを導いている。大野晋「1953」および阪倉篤義「1966」によれば、「神から」のカラは、ものの本来的な性質が自ずと現れることを表すと考えられる。右の二例では、潜在する性質が何らかの形で顕在化するという関係が措定されたうえで、顕現したありようから遡及的に、潜在する本来的・本源的な性質の存在が導かれているのである。

第一節で述べたナポレオンの例からもわかるように、アブダクションの基本は、観察や経験が可能な証拠に基づいて、観察や経験が不可能な事柄を推論するということである。こぼれた豆の例でも同様であって、既にこぼれている豆と袋の中の豆は観察可能であるが、「この袋からこぼれた」ということ自体を観察することはもはや不可能である。「神からならし」の二例は、現に経験される事態に基づいて、その背後にあると考えられる不可視的な本性が推論されるという点で、アブダクションの基本的なあり方を明瞭に表すものである。仁科明「198」がラシの用いられ方について「見えないことの顕現」と述べたことは、ラシが表すアブダクションの特質を的確に述べた指摘として捉え直すことができる。

三・二 I—2型

I—2型は、はじめに述べた仁科氏の「因果関係推量」に相当するものであるが、本稿の立場に基づいて改めて説明する。

三香原 布当の野辺を 清みこそ 大宮所 定めけらしも

〔異等霜〕

(6・一〇五一 福麻呂歌集)

久迹京を讃美する長歌に続く反歌である。大宮所を決定する理由に言及する文脈であり、大宮所が定められるとは、ここでは大宮所にふさわしい地として認められることと同義である。第三句のコソに着目すれば、文の焦点 (focus) はコソの直前の「三香原布当の野辺を清み」にあることが知られる⁽¹⁰⁾。すなわち主張の中心は、大宮所にふさわしい地として認められた理由が何であるのかという点にある。情報構造の観点からいえば、布当野に大宮所が定められたこと自体は旧情報として述べられ、その理由が布当野の清々しさにあることが新情報として示されている。

このことを踏まえて、ラシが表す判断の構造を考えたい。歌の基礎にある論理関係を、一般的な三段論法による演繹の図式に即して整理すると、次のようになる。

- 1 清らかな地は大宮所にふさわしい地として認められる
- 2 布当野は清らかな地である

←

3 布当野は大宮所にふさわしい地として認められる

大宮所の置かれた理由が布当野の清らかさにあるということが、蓋然性の高いことがらとして主張されている以上は、まず1が自明の前提として考えられているのでなければならぬ⁽¹¹⁾。かりに1の大前提に疑問が呈されるとすれば、そもそも清らかであることと大宮所を定めることとの関係が不明となり、野が清らかだから大宮所を定めたなどとは主張しえないはずだからである。そして、現に布当野に大宮所が置かれているので、3が現に存する事態とみなされ、2はその理由となる事態である。前述の情報構造を考慮すれば、この歌では、現に存する事態(3)が既知の前提となっており、その理由にあたる事態(2)が新たに主張されている。要するに、1と3を踏まえたうえで、3の理由として2を主張するという構造であり、これはまさにアブダクションの推論形式である。その意味でI—2型のラシの文は、I—1型のラシの文と同一の判断構造を基盤としている。

ただし、両者は主張のありかたが異なっている。I—1型では、現に存する事態(例えば花が咲いたこと)の理由となる事態(春が到来したこと)が単に成立していることを主張していた。しかしI—2型の場合は、現に存する事態の理由となる事態が何であ

るのかを主張している。布当野が清らかであるか否かが重要なのではなく、布当野が清らかであることが理由であるか否かが重要なのである。この相違は、I―1型とI―2型のラシが現れる文形式の違いにも反映されている。第二節で《凡例》として示したアブダクションの構造を再掲して説明を試みる。

1 一般的な三段論法の大前提

3 一般的な三段論法の結論

(Ⅱ現に存する事態)

←

2 一般的な三段論法の小前提

(Ⅱ現に存する事態の理由となる事態)

I―1型では、3が明確に言明され、それを根拠として主張される2の直後にラシが付される形式であった。I―2型では、2が中心的主張内容である点と同じだが、「2が理由で(焦点)、3であるのだ」という文形式がとられる。このときラシは、2の直後に付くべきであるかのように思われるが、実際には文末の述部に付されている。これは現代語で「ここは標高が高いから(焦点)、涼しいであろう」のように、推量によって導かれた中心的主張内容(焦点)が連用修飾成分にあるにもかかわらず、推量の助動詞は文末の述部に付されるということと同様の現象である

と解釈できる。このような事情から、見かけ上は、I―1型では2の内容(現に存する事態の理由となる事態Ⅱアブダクションで導かれた事態)の直後にラシが現れるが、I―2型では3の内容(現に存する事態)の直後にラシが現れるという相違が生じている。そうした外面上の違いにもかかわらず、根柢にある判断構造自体は、I型のアブダクションとして通底していると考えられるのである。

久迩京讃歌のようなミ語法を伴うもの以外に、已然形中止法で理由を示す場合など、I―2型の表現例をいくつか挙げておく。

破線部は文の焦点を示す(12)。

……古も 然にあれこそ うつせみも 妻を 争ふらしき

「良思吉」

(1・一三 天智天皇 已然形中止法で理由を示す)

我が背子が かざしの萩に 置く露を さやかに見よと 月は照るらし「良思」

(10・二二二五 「と」で理由(意図)を示す(13))

彦星の かざしの玉し 妻恋ひに 乱れにけらし「祁良志」
この川の瀬に

(9・一六八六 人麻呂歌集 「に」で理由を示す)

峰の上に 降り置ける雪し 風のむた ここに散るらし「良

思」 春にはあれども

(10・一八三八 理由相当の表現を有する)

最後に挙げた例は、理由であることを明示的に意味する言語形式をもつわけではないが、破線部が理由に相当する内容として解釈されるものである。現に散っている雪を見て、春なのにここに雪が散っているのは、峰の上に降り積もっていた雪が風に吹かれてきたからであろうという推論がなされている。

前項で I—1 型について「神からならし」という例の存在にふれたが、I—2 型にも「山かららし」「川かららし」がある。

み吉野の 吉野の宮は 山から「山可良」し 貴くあらし「有師」 川から「水可良」し さやくくあらし「有師」……

(3・三一五 大伴旅人)

吉野宮が貴く清々しくある状況に接して、それは山川の本来的性格に由来するのであると推論する。顕現する事象の背後に潜在する事柄を捉えようとするアブダクションの特徴的なあり方が、ここにも明瞭に見られるといえる。さらに注目されるのは、I—2 型には「うべ(し)」との共起が複数見られることである(14)。

……み吉野の 秋津の宮は 神からか 貴くあるらむ 国からか 見が欲しからむ(15) 山川を 清みさやくみ うべし

「諾之」神代ゆ 定めけらし「家良思」も

(6・九〇七 笠金村)

山川の清々しさを理由とみなすことで、古くから吉野で宮が営まれたことに対して納得が与えられている。第一節で述べたように、アブダクションはまさに、説明を要する事実に納得を与えようとする推論であった。「うべ(し)」との共起例の存在は、ラシの意味を論じるにあたってアブダクションという概念を援用することの有効性・重要性を例証するものと思われる。

三・三 「気づきのケリ」との関係

I 型のアブダクションは、「気づきのケリ」でも表されうる。

庭草に 村雨降りて こほろぎの 鳴く声聞けば 秋付きにけり「家里」 (10・二二六〇)

皆人の 恋ふるみ吉野 今日見れば うべも恋ひけり「来」

山川清み (7・一一三二)

第一例は、村雨とおろぎの鳴き声といった現に存する事態に基づいて、その理由に相当する秋の始まりを推論するアブダクションであり、I—1 型のラシと同様の推論形式である。第二例は皆が吉野を恋うることの理由が、山川の清さにあるのだと推論し納得するものであり、I—2 型のラシに対応する。アブダクションは発見の論理であるといわれる(16)。ニュートンが林檎の落下

を見て万有引力の思想に思い至ったというものも、説明仮説として万有引力の存在を指定すれば諸現象を整合的に説明できるというアブダクションであり、この推論形式は種々の発見に深く関わっている。その発見という側面に重点が置かれると「気づきのケリ」の表現になるのであろう。このことから、ラシはラムに加えてケリとも意味領域が重なっていたと考えられ、しかもケリとの競合は、萬葉集のラシの九割を占めるⅠ型全体で生じうる。中古以後のラシの衰退理由を考えるには見逃せない事実である（17）。

第四節 議論を要する例の検討

本節では【図1】で保留とした一一例（①～⑪とする）について、稿者による理解を明らかにしつつ、位置づけを検討する。

なお、各歌の解釈については今後の課題とすべき点も含まれており、かりに保留のままとした場合にも、萬葉集のラシの全体的傾向を述べる論旨に対して大きくは影響しない。とはいえ、以下に述べるような解釈によれば、一見例外的な用例であっても、前節までに見たラシの諸例との間で大きな矛盾をきたすことなく、整合的な理解が可能となるのではないかという提案の意味もこめて、稿者の読解を一例ずつ述べてゆきたい。

四・一 Ⅰ—1—3型の設定

①我が背子が 着せる衣の 針目落ちず 隠りにけらし「家良之」 我が心さへ （4・五一四 阿倍女郎）

阿倍女郎が中臣東人への想いを詠んだ歌である。あなたの着物の縫い目に、縫糸ばかりか自分の心までもが入りこんでしまったようだと言われる。そうした推論の根拠は、明示的には述べられていないが、夫への想いがやまない自分自身の現状そのものであると考えることができる。これほどにあなたへの想いが絶えないのは、心があなたの着物に入ってしまったからなのであろうという意味に解すれば、①のラシは、現に存する事態に理由説明を与えるアブダクションとみなされる。このように自己が現に何らかの思いにとらわれていることを証左として、戲画的な内容が推論されるという例は、萬葉集には他にないが、古今集には

わが恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし （古今集恋一・四八八）

を指摘することができる。ただし、古今集の例では「思ひやれども行く方もなし」のように、推論の根拠となる自己の現状が言語化されているのに対して、①ではそれが明言されていない。①のラシは、推論の構造においてⅠ—1型と同じであるものの、根拠となる事態が一首の中に言語化されておらず、あくまで解釈上の

可能性としてそれを想定しうるにとどまるという点で、I—1—1型やI—1—2型とは異なる。これを新たにI—1—3型と称することにする。このように整理すればI—1型は、現に存する事態（推論の根拠となる事態）がどれほど明示的に述べられているかという程度に即して、知覚をマークする明確な表現を伴うケース（I—1—1型）、知覚のマークはないが状況が言語化されているケース（I—1—2型）、言語化自体がなされていないケース（I—1—3型）という三段階で捉えられることになる。

四・二 II'型の設定——讃酒歌のラシ

大伴旅人の讃酒歌は、全十三首のうち五首がラシで結ばれている。近年の研究では、歌群内に（現実の旅人自身とは異なる）一人の酔った男という作中人物を想定する見解が提出されている。以下に提案する解釈は、そうした近年の研究動向と軌を一にしつつ、同時に、これまでに論じてきたラシの意味理解の延長で各歌を読解することを可能にしようとするものである。

歌群の冒頭は次の歌である。

② 験なき 物を思はずは 一坏の 濁れる酒を 飲むべくあるらし「良師」
(3・三三八 大伴旅人)

鉄野昌弘[2016]は右のラシについて、『時代別国語大辞典 上

代編』の「客観的な事実」に基づく推定という語釈を引きながらも、ここでは「客観的な事実」など見当がつかないとして、「根拠はおそらく、話者の心の中にしかな」く、「主観・内省こそが根拠」であると述べる⁽¹⁸⁾。そして、②で推論を行う「話者」とは現実の旅人そのものではなく、あくまでも造形された酔客であることを指摘する。李満紅[2019]も、讃酒歌には「ある酒飲みの男」という作中人物が設定されているという見解を述べている。すなわちテキストの内部に、男の独酌の場が描定されていると見られる。②のラシは、作中人物自身の内省に基づいて、物思いに苦しんでいるよりはむしろ飲酒が望ましいとする判断がなされたことを表すものと考えられる。そうした価値判断が具体的にいかなる内省によって導かれたのかは、第二句のズハの問題を踏まえて検討する必要があるため、議論が複雑になる。後で改めて論じることにして、同歌群に含まれる次の三首を先に検討したい。

③ 賢しひと 物言ふよりは 酒飲みて 酔ひ泣きするし まさりたるらし「良之」
(3・三四一 同)

④ 言はむすべ せむすべ知らず 極まりて 貴きものは 酒にしあるらし「良之」
(3・三四二 同)

⑤ 世の中の 遊びの道に ずしきは「冷者」⁽¹⁹⁾ 酔ひ泣きするに あるべかるらし「良師」
(3・三四七 同)

大鹿薫久「1967」は右の歌々が「飲酒または酒についての一般的な物言いである」ことを指摘している。賢しかな物言いよりも酔い泣きが勝る(③)、究極的に貴いものは酒である(④)、世の中の遊びの道としては酔い泣きこそが快い(⑤)といった内容はいずれも、ラシの解釈を一旦措けば、一般的普遍的な事実の言明として理解できるものである。大鹿氏のこうした指摘と、当該歌群に男の独酌の場を想定する近年の研究を合わせると、次のような解釈の可能性が考えられる。作中人物は酔い泣きをしながら酒に耽溺しており、現に自分自身が苦しみのない、快い時間を過ごすことができていることから、一般に酔い泣きは素晴らしい、酒は貴いという判断がなされていると解されるのである。こうした解釈は、大鹿氏の「個別の経験に飲酒・酒の一般的な価値を見ている」という理解と通底するとともに、ラシの把握にとつても重要な意味をもつ。③⑤に個から一般を導くという推論のあり方が見出されるとすれば、ここでのラシをⅡ型(帰納)と類縁的な用例として把握することができるからである。ただし③⑤は、第一節で示した「うつせみはしらし」のように、ある集合を規定したうえでなされる全称命題の言明とは断じがたく、ラシによる判断の背景に一般化という操作を想定しうるだけである。このように、帰納による全称命題の提示とは言い切れないものの、個か

ら一般へという方向の推論を解釈上想定しうる用例を、Ⅱ型と類縁的なタイプと見てⅡ型としておく(20)。

讃酒歌にはラシがもう一例存する。

⑥古の 七の賢しき 人たちも「毛」 欲りせしものは 酒にしあるらし「良師」 (3・三四〇 同)

第三句の助詞「も」に注意したい。作中人物自身と同様に七賢も酒を欲したのであると述べられている。作中人物と七賢は同類に属すると考えられていることになる。鉄野昌弘「2016」は同じく「も」に着目し、保身のために酒を必要とした阮籍の逸話をふまえて、「酒の力を借りなければ生きてゆけない、弱い人間同士の共感」が読み取られることを述べている。酒に酔うことで物思いの苦しみを解消している自分自身と同様に、胸中に苦しみを抱えて生きる人間はみな止むに止まれず酒を必要としてきたのであり、七賢たちもそれに該当する。このような意に解すれば、歌の根柢には自己の個的なあり方を類へと拡張する操作が見出されることになる、⑥のラシはⅡ型に含められる。

以上を踏まえて、同歌群冒頭の②を改めて検討したい。

② 験なき 物を思はずは 一坏の 濁れる酒を 飲むべくあるらし「良師」 (3・三三八 同 再掲)

第二句「物を思はずは」は、反実仮想に与る特殊語法ズハの性

質上、作中人物が現に物思いにとらわれていることを示す⁽²¹⁾。そのため飲酒の最中ではなく、これから独酌を始めようという場面が想定される。これまでに確認してきたラシの用例はすべて、現に存する事態を根拠とした推論を表すものであったから、他例との整合性を考慮すれば、②でも同様の説明が試みられてよい。現に存する事態として、歌の表現から読み取れる内容は、甲斐のない物思いをしているということだけである。小柳智一「2004」が指摘したように、特殊語法ズハの前件（「験なき物を思ふ」）は言語主体にとって望ましくない事態であるので、物思いは作中人物にとって多かれ少なかれ苦であると想定される。現に物思いに苛まれていることを根拠として推論がなされるとすれば、自身自身の現状が苦であることから、物思いなどよりもむしろ独酌をすべきだ——少なくともその方がましだ——とする当為判断が導かれたと考えるほかにない⁽²²⁾。すなわち、作中人物自身の個的な状況を根拠とすることで、ベシという行為の規範が導かれたものと解される。規範とは個々の行為を制約する一般的基準であるから、②の判断の背景には個（自己自身の現状）から一般（行為の規範）を導く推論を想定しうる。このように理解することで、②のラシをⅡ型に含めて考えることができ、他のラシの諸例との間で不整合に陥ることのない把握が可能となる。

なお、②・⑤のようにベシとラシの共起例が存在することの説明は、紙幅の都合もあり、別稿を用意して検討したい。両助動詞がベシ—ラシの順序で承接するということは、意味の面からいえば、ベシがラシに比して対象的（客体的・事態的）意味への広がりをもつことに関わり、形態の面からいえば、ベシがラシよりも多様な活用形を備え、各種助動詞に前接しうることに関わると考えられる。ラシに対するベシのそうした複雑な発達の背景には、ベシが漢文訓読に多用されることが関連している可能性がある。別稿で検証したい。ここではベシとラシの共起例として、萬葉集中には他に次の一例が存することを指摘するにとどめておく。

秋萩は 咲きぬべからし「可咲有良之」⁽²³⁾ 我がやどの 浅
茅が花の 散りぬる見れば

（8・一五一四 穂積皇子 I—1—1型）

四・三 派生的意味

⑦ 香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき 神代より
かくにあるらし「良之」 古も 然にあれこそ うつせみも
妻を 争ふらしき「良思吉」 （1・一三 天智天皇）

ラシが二例含まれるが、第二例は既に述べたようにI—2型である。問題となるのは第一例である。「神代よりかくにあるらし」

は、後の文脈との関わりで考えれば、ひとまずは「うつせみも妻を争ふ」ことの理由を推論したものと解される。現に妻争いがあり、なぜそのような争いがあるのかという疑問に対して、古くは神代から存する普遍的な行いであるといえるならば納得がゆくというアブダクションとして理解できるのである。しかし、なお問題が残る。前からの文脈を確認すれば、神代に三山の妻争いがあったということは、既に「相争ひき」という形で確言的に述べられている。にもかかわらず、その直後で同内容が蓋然的推論の形で述べ直されるとすれば不整合である。この用例には、ラシがアブダクションに関与しながらも、派生的意味へと傾向してゆく一つのありかたが示されているように思われる。

繰り返して述べてきたように、アブダクションの基本的なあり方は、不可視的潜在的な事柄を推論することであった。落下する林檎は観察可能であっても、万有引力の存在そのものは観察することができない。しかし万有引力があると考えなければ、世界の諸現象に説明がつかず、道理に合わない。このことから確信的に万有引力の存在が導かれる。ここに、アブダクションの推論を表すラシが、不可視的なものへの確信といった意味を派生的に獲得することが考えられる（以下、これを派生的意味と称する⁽²⁴⁾）。⑦の三山の争いは、過去の出来事として述べられている以上、今と

なつては不可視の事態である。「神代よりかくにあるらし」は、三山の争いが現在では不可視でありながらも、かつては間違いなく存在したということを、強い確信をもって述べる表現として理解してはどうか。同時に、後ろの文脈との関連を重く見ればアブダクションを表すとも解されることから、ここでのラシはI型と派生的意味との連続面が現れた用例であると位置づけられる。

ラシがこのように派生的意味を担っていると思われる例は、他に以下のものがある。

⑧⑨ やすみしし 我が大君の 夕されば 見したまふらし「良之」 明け来れば 問ひたまふらし「良志」 神岡の山の黄葉を 今日もかも 問ひたまはまし「麻思」 明日もかも 見したまはまし「萬旨」……

（2・一五九 持統天皇）

天武天皇崩御の折、後の持統天皇によって詠まれた挽歌である。二つのラシは「神岡の山の黄葉」にかかる連体修飾と考えられ、「天皇の御霊が夕方にご覧になり明け方にお訪ねになっているにちがいない（あの）神岡の山の黄葉」という理解が一般的である。ここでのラシをアブダクションや帰納といった概念で説明することは難しい。不可視的な事態への確信が表されていると考えれば、従来の当該歌の解釈に反することなく、ラシの意味としても無理

のない理解が可能になる。今も必ずや、どこか私たちの知り得ないところで天皇の御霊は黄葉を愛でているにちがいない。そうした確信は既に推論ではなく、一種の信念の表明に等しいものであるが、二次的な意味としてラシがこうした情意を表し得たものと思われる。なお、後の文脈では破線部のようにマシが用いられ、天皇が在世であれば、神岡山の黄葉を今日もお訪ねになり、明日もご覧になるだろうかという反実仮想の表現がなされている。まずはラシによって、天皇の御霊の動きを、不可視であっても現実を起こっているにちがいない確かなことがらとして述べる。その後、マシを用い、かりに在世であった場合の天皇の行動に思いを馳せ、現実とは異なる仮想の描写に転じるといふ構成がうかがわれる（25）。

⑩大君の 継ぎて見すらし「良之」 高円の 野辺見ること
音のみし泣かゆ （20・四五二〇 甘南備伊香）

聖武天皇崩御後の歌であり、前例の挽歌のラシと同様に考えられる。派生的意味を表すと思われるラシは、このように挽歌的な文脈に用例が偏っており、あくまで文学的な意匠としての、ラシの本義の転用であった可能性も否定できない。

四・四 その他

⑪み雪降る 冬は今日のみ うぐひすの 鳴かむ春へは 明日にしあるらし「良之」 （20・四四八八 三形王）
天平宝字元年十二月十八日、三形王宅での宴席歌である。明日が立春であることを具体的に述べるだけであれば、あえてラシが用いられている理由を説明しがたい。解釈上の可能性として、かりに眼前に何らかの春の兆しがある（あるいはそのように想定している）と考えられれば、アブダクションの根拠を明言しないI—1—3型になる。だが、歌から得られる情報が少なく、類歌もないため判断が難しい。⑪については本稿では結論を保留する。

おわりに

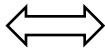
萬葉集のラシの全体像について、第二節で示した【図1】は、次の【図2】のように書き改められる。本稿の結論を示す図である。最後まで保留とした⑪は除いたが、①～⑩はすべて振り分けられている。ベシとの対照的な関係も書き添えてある。

【図2】

ベシ

一般的な三段論法に即して前提から結論を導出する

（演繹 必然的推論）



ラシ

一般的な三段論法の結論から前提を導出する

(アブダクションと帰納 蓋然的推論)

● I 型 アブダクション……一六〇例

○ I-1 型 現に存する事態に基づいて、その理由となる事態が成立していることを主張する……一三四例

・ I-1-1 型 現に存する事態(推論の根拠となる事態)について「見る」「見ゆ」「聞こゆ」「なり」という明確な知覚のマーカを有する……四四例

・ I-1-2 型 I-1-1 型のような明確な知覚のマーカはないが、現に存する事態(推論の根拠となる事態)が言語化され描写されている……八九例

・ I-1-3 型 現に存する事態(推論の根拠となる事態)が言語化されておらず、解釈上の可能性としてそれが想定される……一例

○ I-2 型 現に存する事態について、その理由となる事態が何であるのかを主張する……二六例

● II 型 帰納……八例

● II' 型 帰納による全称命題の提示とは断じがたいが、個から一般へという方向の推論が想定される……五例

● 派生的意味 不可視的なものへの確信……四例

*三山歌の第一例(⑦)を含む

〈注〉

(1) 中西宇一 [1996]、内田賢徳 [2013]、仁科明 [2016]。

(2) 萬葉集の引用は、井手至・毛利正守『新校注萬葉集』(和泉書院、二〇〇八年)に基づく。

(3) 以下、パースによる推論の類型や、その一つであるアブダクションに関する内容は、C. Hartshorne and P. Weiss (eds.) [1931-35] に加えて、米盛裕二 [2007] を参照。

(4) 歌番号は 3・四七八、4・七三八、5・八〇四(「一云」も含めて二例)、5・八八六、7・一四一〇、12・二九二八、19・四一六〇。

(5) 萬葉集におけるベシとラシの用例数はともに一八〇〜一九〇例程度であり、数量的拮抗という点からも両者の張り合いがうかがわれる。

(6) このうちアラシ、ナラシ、ケラシなど複合形とされる類は六七例含まれている。ラシ一八〇例の中にまったくの訓添の例はなく、すべて何らかの漢字表記に対応している。ただし「疑」をラシと訓んでいる二例(10・二二〇七、10・二二二一

○)はラムという訓もあり得るが、ここではラシの例に含めている。仮にこの二例を除いても、本稿の論旨に影響はない。

- (7)「現に存する事態」は多くの場合「観察可能な現在の事態」である。しかし三・一で見る「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」(17・四〇〇一)のように、「見れども飽かずぬ」という現在の自己の思いである場合もあり、その場合は観察可能とは言えないし、三・二で見る「三香原布当の野辺を清みこそ大宮所定めけらしも」(6・一〇五一)などは、現に都が定められているものの、現在都を定めるといふわけではない。こうしたものも広く含んで、「現に存する事態」という表現で一括しておきたい。

- (8)『新校注萬葉集』は「神ながらならし」の訓を採るが、ここでは次に挙げた家持歌との整合性に鑑みて「神からならし」の訓で引用した。「ながら」であるとしてもカラとの語源的関連が想定されるので、この後に述べている論旨に抵触しない。

- (9)「見る」という語が入っているが、「見れども飽かず」全体が現に存する事態(推論の根拠となる事態)なのであって、根拠となる事態を知覚したという意味での「見る」ではないので、I—1—2型となる。

- (10)阪倉篤義[1975]がコソに Prominence の働きを認め、小川

栄一[1989]がコソの上接語が焦点となることを指摘した。

- (11)直前の長歌の「高知らす布当の宮は川近み瀬の音ぞ清き山近み鳥が音とよむ……うべしこそ我が大君は……大宮こと定めけらしも」(6・一〇五〇)に加え、「山川を清みさやけみうべし神代ゆ定めけらしも」(6・九〇七)、「今造る久迹の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし」(6・一〇三七)などの例から、清らかな地は大宮所にふさわしい地として認められるという理解が共有されていたことがうかがわれる。

- (12)I—2型に分類される二六例のうち、コソによって焦点が明確化されているものは五例にとどまるが、その他の例もすべて、現に存する事態の理由に焦点があると解釈されるもの(そのように考えなければ文意が通らないもの)である。

- (13)この構文の性格は勝又隆[2020]、吉井健[2020]を参照。

- (14)「うべ(し)」との共起については既に内田賢徳[1992]に指摘がある。I—2型で「うべ(し)ゝらし」という表現を持つ歌は、ここで引用している例の他に、6・一〇三七、6・一〇五〇、6・一〇六五、20・四三六〇。

- (15)「神からか貴くあるらむ国からか見が欲しからむ」は、I—2型のラシが担うのと同様の推論であるが、ラシが疑問文で用いられないことから、このようにラムなどが用いられてい

ると考えられる（仁科明 [2016]）。

(16) 米盛裕二 [2007] に詳しい。

(17) ラシの衰退を、ケリとの数量的比較などによって通時的に跡づける試みは、今後の課題としたい。なお、ラシで表される内容が実はラシを用いずにも表されえたというケースは、Ⅱ型の帰納にも存する。例えば「世の中を常なきものと今そ知る奈良の都のうつろふ見れば」（6・一〇四五）は、「世の中は常なきならし」と結果的にほぼ同義であると思われる。

(18) これは伊藤博 [1975] が「讃酒歌」のラシに「反省」や「自省」を読み取っていることとも通じる指摘である。

(19) 『新校注萬葉集』では「怜者」で「たのしきは」と訓むが、諸本は「冷者」で異同がない。ここでは誤字説を避け、鉄野氏論文をふまえて、「すずしきは」の訓で「爽やかなことは・快いことは」と解しておく。

(20) 以上の見解に基づく、例えば③は「酒を飲めばこゝなふう、に苦しみのない時間を過ごせるのだから、一般に賢しらに物を言うよりも、酒を飲んで酔って泣く方がまさっているようだ」のような意味になる。④や⑤についても同様に、傍点部分を補って解される。

(21) ズハの語法が反実仮想に偏ることについては、小柳智一

[2004]、栗田岳 [2010]、拙稿 [2018]。

(22) 独酌も望ましいものではない。友がいない中で孤独に飲む酒は気の進まないものであることを鉄野氏が指摘している。

(23) 現在はベカラシと訓まれることが多く、この訓ではベシとラシの二語とみなしうるのが難しいが、例えば類聚古集の訓は「咲くべくもあらし」であり、漢字本文では「可」と「良之」が表記されていることからしても、ベシとラシの共起として扱うことに問題はないと思われる。

(24) これを例えばⅠ型などと番号を付して呼ばないのは、Ⅰ型やⅡ型（あるいはそれと類縁的なⅡ'型）のような合理的推論とは異質な、情意的な面を有するものと考えからである。

(25) ラシとマシを使い分けるこのような構成について、澤瀉久孝『萬葉集注釈』が本稿とほぼ同内容の指摘をしている。

〈参考文献〉

伊藤博 [1975] 『万葉集の表現と方法 上』塙書房

内田賢徳 [1992] 「助動詞ラシの方法」『記紀萬葉論叢』塙書房

内田賢徳 [2013] 「萬葉集におけるラムの出發と展開——ラシとの交渉——」『萬葉』二二五

大鹿薫久 [1997] 「助動詞「らし」について」『語文』六七

- 大野晋 [1953] 「カラ」と「カラニ」の古い意味について』『言語民俗論叢 金田一博士古稀記念』三省堂
- 小川栄一 [1989] 「係結びと焦点」『福井大学教育学部紀要 第一部 人文科学(国語学・国文学・中国学編)』三七
- 勝又隆 [2020] 「上代におけるミ語法と「動詞終止形＋ト」節の構文構造」『日本語文法史研究5』ひつじ書房
- 栗田岳 [2010] 「上代特殊語法攷―「ずは」について―」『萬葉』二〇七
- 小柳智一 [2004] 「「ずは」の語法―仮定条件句―」『萬葉』一八九
- 阪倉篤義 [1966] 『語構成の研究』角川書店
- 阪倉篤義 [1975] 『文章と表現』角川書店
- 鉄野昌弘 [2016] 「「大宰帥大伴卿讃酒歌十三首」試論」『萬葉集研究 第三十六集』塙書房
- 中西宇一 [1996] 『古代語文法論 助動詞篇』和泉書院
- 仁科明 [1998] 「見えないことの顕現と承認―「らし」の叙法的性格―」『国語学』一九五
- 仁科明 [2016] 「上代の「らし」―述語体系内の位置と用法―」『国語と国文学』九三・三
- 古川大悟 [2018] 「上代の特殊語法ズハについて―「可能的表現」―」『萬葉』一二二五

- 古川大悟 [2023] 「ベシの多義性の原理について―現代語ハズダとの対照から―」『花園大学日本文学論究』一五
- 吉井健 [2020] 「動詞終止形＋ト」を前件とし後件に引用動詞を持たない文の位置づけについて」『日本語文法史研究5』ひつじ書房
- 米盛裕二 [2007] 『アブダクション 仮説と発見の論理』勁草書房
- 李満紅 [2019] 「讃酒歌十三首」の構成及び語りの方法」『古代研究』五二
- C. Hartshorne and P. Weiss (eds.) [1931-35] *Collected Papers of Charles Sanders Peirce. Vols. I-VI*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press. (米盛裕二・内田種臣・遠藤弘編訳『パース著作集1-6』勁草書房)
- 付記 本稿はJSPS 科研費 22J00132・22KJ3048 の助成を受けた成果を含む。
- (ふるかわだい)・日本学術振興会特別研究員)